



類題答与之解集 秋

^ 5  
1500  
3



門 割  
踏 1.500  
卷 3

類題發句三休集目錄

○秋之部

野菊	西風	蘭	藤袴	女良花	秋海棠
桺散	落水	秋涼	牽牛花	木槿	桔梗
穗舍	相撲	花火	初嵐	二百十日	桐一葉
盆の月	盆踊	扇置	三尋寺詣	殘暑	稻妻
生身魂	棚經	瓜の馬	蓮飯	送火	掇待
鼠尾艸	墓參	大文字	鬼迎	鬼祭	精靈會
貸小袖	燈籠	盃蘭盆	盆布	盆遊	芋壳賣
梶ノ哥	星祭	鶺鴒の橋	燈姫	硯洗	立琴
立秋	文月	初秋	今朝秋	天の川	七夕



著せ綿	菊	后月	十三夜	月名殘	長夜
短日	秋暮	露時雨	露霜	秋時雨	秋霜
番船	紅葉	吾赤江	葉萸	霜ノ鹿	尾越鴨
紅葉鮎	暮秋	行秋	冬隣	九月盡	



立秋  
文月  
初秋  
今朝秋

類題發句三集集纏乃部

文月やなみかきし形は秋の散	舟六
朝日乃れうららのや今朝の秋	乙二
そのもの忘れやまきや今朝の秋	完末
今朝の秋鳥も洗ひ次赤けり	摺巻
朝起の人も見つるそ今朝の秋	芦英
秋立や後うきとあけ河掃除	蓬宇
初秋や口より出さるそ出ぬ帯	篤老
初秋や口もわらふそ一垣と水	文里
初秋や指乃抱るそ秋をし顔	三水

文月一しと梅り魚子乃其芳

白二

秋立や曉か事し其嘆もくしゆい  
秋立やあゝ名おほえ其夕乃くれ  
往還一おて依め其別と秋乃秋  
初秋や其川よりゆり粟乃くけ  
秋乃くけ一流れあゝく秋乃立  
揮塵さるる乃くゆりやと秋乃秋  
何んても梅り其さくやと秋乃秋  
秋乃くけ一鳥見よ出さりて秋乃秋  
衣従一よるハ時ゆりて秋乃秋

菊二  
丘高  
榮史  
大可  
芳岱  
丁山  
そめ  
梅多  
心泉

天乃河  
七夕  
梶り哥  
星条  
鵜の橋

蛭子乃乾くぬ袖を星むし  
星の朝やゆりて見えぬまもゆし  
急さをよみさくゆり梶のく  
あけをりしあゝある業利星条  
天乃川條一すしおあゝりく  
一寸一其條とよりくそ一の事  
ふりもとりつふをまゝ星河りせ  
星の末やあゝくゆりて呵らる  
星や川星れ中をく見えふ危  
石橋やゆりあららりて星遠い

青  
后彦  
橋山  
友徳  
雄淵  
且来  
僕五  
外外  
外外  
茂推

二しし子ましたに五雨や天乃川 護お  
ころゆへハ中なり終り 天乃川 平 御山  
この星うぬしてちりえり 祭うぬ 白二

少女もしおゆえけり握乃哥 丹居  
セ夕やあふふもいあふそあは 凡介  
この星もりつあし見ゆる光ふ 一飛  
この星もめてたふ照る星乃あ 一蕙  
一夜ぬけ二夜出てあふ天乃川 月吟  
七夕のあをほくあふやふたあ 芳岳  
まらまらあふあやふああの特はあ 応泉

燈姫  
硯洗  
立琴  
貸小袖  
燈籠

琴系を志めてゆけん 非 志志ぬ  
面くけは尺え遠中 赤切籠系 積雪  
あふのくさいてとむれ 燈籠系 弁眉  
あ乃ちりれまり 燈籠に終るる 遠側

ろちりるるをのを出けや貸小袖 ちりり  
洗ふちりるる侍をは祝可ぬ 系三  
修験を得えり 折や燈籠賣 折雨  
燈籠の下うらむけや廓乃文 白二

雨乃着係ぬ出り ちりり 燈籠 成貞  
燈籠や月七佛 ち十五日 竹風



棚經  
瓜の馬  
蓮飯  
送火

苦いよりサトウの味も〜生身鬼 イセ 雀 叟

棚經やうま一啓新小室得しけ 小義

赤く〜いひひ冷身あり生身鬼 遠洲

持持〜海を去行水原い強 幸甫石

速い〜也祿の多〜人通り 梅室

好ま〜人々〜あり大之十日 共 紫石

了〜と竹を向けやせ沙聖靈 白二

娘〜いゆるれ世の人の鬼乃つ里 青石

初〜あり〜し行せと祿の〜鬼奈 楓下

鬼棚〜し〜あり〜不〜〜〜 下 駿 巻

世〜〜〜後祀〜〜蓮の飯 丹在

鬼棚乃〜淋〜飾〜〜 上 茶 玄

作山〜し〜師〜〜亦乃鬼乃棚 上 茶 玄

棚經やあ〜〜〜後〜〜 下 流水

夫婦〜〜〜〜〜瓜力馬 芽袋

ね〜〜〜瓜の一漢乃電の敷 下 紀久吉

捨ち〜〜焚火〜席〜也鬼速い 御可

横侍

盆の月

盆踊

扇置

世五人〜し〜力〜〜〜 上 茶 玄

東中〜〜〜〜〜 下 升 六

お拂〜〜〜〜〜 下 心 阿

口〜人〜し〜月〜〜〜 下 太 節



三井寺女詣

招りよれえ不意ありし月乃月 士郎  
 さぬくお名も急ありし月乃月 膝堂  
 とれたるお難うのり水と踊るあり 千之  
 降やむと申しお中お踊り可也 仰見  
 掛付し雇ひぬりおおとけう系 雪准  
 掛付や娘はぬりおおとけう系 多々  
 佐村しとておとけう系おおとけう系 遠原  
 ちとておとけう系おおとけう系 大宮  
 おおとけう系おおとけう系 近原  
 見人しとておとけう系おおとけう系 應之尾  
 見人しとておとけう系おおとけう系 吳亮

藤乃とておとけう系おおとけう系 下毛 池葉  
 踊子しとておとけう系おおとけう系 二兵  
 とておとけう系おおとけう系 長月  
 百とておとけう系おおとけう系 白二  
 英しとておとけう系おおとけう系 石彦  
 取勢とておとけう系おおとけう系 一荒  
 おおとけう系おおとけう系 一仙  
 休むとておとけう系おおとけう系 一具  
 人中しとておとけう系おおとけう系 李々  
 三井詣大かしとておとけう系おおとけう系 深島  
 いちおとておとけう系おおとけう系

蝶乃さほやまともか何らん目 一具  
 殿さうふをかりふゆ。踊り糸 卓也  
 春さしへ在孫かりと池忌訪 糸 頑石  
 松うけのまふした踊り人女衣 友徳  
 春ありて踊てあやふゆき雨 香帝  
 おすれし多さしうて夜盆踊 由梨  
 春ありてに青よむ秋乃府ふ 雨徒  
 忘るしうさえのかさきりふさし 子以  
 踊子乃あはれし紅音春味うぬ 風武  
 新しうけを月てあし踊りぬ 桂電  
 松侍やあ葉よりと列し 心泉

残暑 稻妻 穂舎 相撲 花火

稲つ戸やおもへ入屋声山もきし 可嘉也  
 穂屋床し一月を色先小川 岸 一蕙  
 角力取存乃も存もも在事次 雨芽  
 残りもと文し心しはありさ 愈々  
 足利しとあはれし紅角力也 愈々  
 小代と噂の松ももあや猪角力 惟子  
 角力場へ魚乃もまきし体肉美系 一響  
 女子不と女中しは進し 舞屋 肴三  
 浪人のあてとま信やく花火う糸 一具  
 厚川しとと人のあまあや毛角力 一茶  
 将ていもまし川あはれや角力を 美人



桐一葉  
 柳散  
 落水  
 秋涼

唐の戸へ指ひ入事り桐一葉不  
 今秋を去るに後にもありは桐一葉  
 東くちの舟て多由中次知事し  
 士 郎  
 棟 堂  
 岱 年

相二葉合さるる水も合さるる 十六寸 風  
 桐の葉あはれは 暮るる 虫をよと 朝 法 風  
 相の葉あはれ 二日下 二葉不 暮るる あり 梅 堂  
 是くくち凡一本し 七 暮るる 水 大 虚  
 暮るる 月 暮るる 乃 凡 吹 水 中 月 下  
 秋 涼 一 法 中 一 と 知 一 飽 売 弘 之  
 出 一 き ぬ の 表 の 乃 水 初 時 し 白 二

牽牛花  
 木 槿  
 桔 梗  
 野 菊

門ゆくまをみかてわつらや 落 一 水 鳳 鳥  
 相一葉あはれ 暮るる 暮るる も 暮るる あり 夕 光 共 千  
 ちり 柳 了 と ぬ 絲 の 向 可 ぬ 舟 庭  
 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 柳 堂  
 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 相 一 葉 不 燕 月  
 小 葉 あり 引 手 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 知 見 文 里  
 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 二 百 十 日 一 凡 応 永

冷くくしおと 虫の 向く 槿 根 の 水 士 郎  
 一里不し 木 槿 足 多 ぬ 暮るる 暮るる 暮るる 暮るる 養 虬  
 山 中 咲 け 服 之 虫 木 槿 一 葉 卓 堂











三繩乃部

三日月

新月

有明

月暈

月霜

月雪

初月夜

山星やけりうふかしくおそく月日東  
初秋しりばくひあはれし初月東  
月日東  
はくくまきとまきまきいば株を初月東  
卓岱

まけてえんれん大きふ板不  
標

まけやえ一月ふあふふ盤の賽  
魚身

初月やあししもせくぬ山の宴  
芽岱

豫立乃村秀合やこりの月  
亮改

本荒乃屋くまきとあり月乃を  
和帝

折好しつとまき甲斐と  
白二

是をえておまきし何也し三日の月  
素葉

改漢やあふりすし小月の暈  
二息

あものともあしと入あり三日の月  
士伯

ま株あらしてえんれんふし月の雪  
御可

定中月し入際ええん板の雪  
文桂

新月の下ま株よまふ山の宴  
桂二

新月やうきく婿しりまきと  
月時

露

露

露寒

身入

盡りともあし乃あふり山日  
月居

災し和取もあし次なるあふり  
月居

世の中まよふふまきしそのあ  
一葉

宵折乃えんて田畑乃あふり  
雀叟



薄 葛

庭をよき花とて小池一帯の中平苔徒  
 芳遊て青なしく海ハ露エたり 三 露玉  
 扶立し戸くちも露花吹りふ。天観  
 一粒も露ふり送ららば子の露、完良  
 子の露月ト出さるりしをくろくを  
 石亭 石亭  
 ことりれし身し山乃老くも  
 弘々 弘々  
 皆りけふあはれもねし露を  
 若 若  
 白露りや露のふく北よま露  
 亦 亦  
 秋とてふ露りあや山乃子 道亮  
 月光しし露を風く小露り 日人

花野

穂の上巾一妹とそしぬ山乃子 桂重  
 朝すし一六条そりはる凡者 子 子南

州穂

ち体薄きくあすのう船子足也 一 菜

花市

月おくれははるすれ乃と川き系 子 大 大

体し少は冷つふよははすれ 阜 阜

晴切多し水色しかりあや新田娘 乙 二

吹名の出ぬ甲まおくりりる新田娘 素 素

花やうり浪津流哉すや新田娘 庭 庭

春のそれ一まし咲き多きい色 后 二

子市や身ぬるふる此何らる 房 壺

毘沙門神上より降る薄うき 六 吳藍  
海一きと結ひ集一薄うき 牙茶

花すくねぬま乃ありれと吹砂以 蒼乳

穂のゆれて葉乃凍げあて道ふ 少詩

高き帯をよして控てまうき乃茶 央千

高うまもまよと一葉一紅唇ふ 映山

鳥深のうまもまよと一葉一紅唇ふ 亦化

あつむく一れりまもまよと一葉一紅唇ふ 丁五

むすくれ月子あれてさわきりり 仙山

二日月て秋より吹すれ 乳子

外すく一りり一葉一紅唇ふ 応子

芭蕉

鶏頭

鬼灯

布瓜

南瓜

番椒

木綿取

菓毛

新玉子四角ありとてを成静あま 五用

結近よりさうとさうれぬとを成ふ 桑北

高栗や鬼乃りて成静あま 成員

推高のその葉に石はうりぬま 雪根

子成味も母とさふりり栗粒ひ 二丘

窮路や何ふ月傳はるの月末 碓石

言と片俺やとを成の雨け一れ 柳室

あつむく一れりまもまよと一葉一紅唇ふ 意多

花波をよ扇まて赤一葉一紅唇ふ 茂凌

南瓜やりれぬあはれ乃誦 白二



愛しのをえん川やゆれ流るるに 来月  
傍葉もを甲しつ川をしよ。白蛇  
谷月如曳てるしれを明子魂 月士

東吻し乃海しよをいし明子系 年代

火をうりふぬりしを曳や明子魂 大可

石とてををわてをいし明子系 大菜

門つら子乃と敷よ出てをいし 由藝

出ぬしよ古出似アしをきしをいし系 弘々

指をるれをいししをいし成小幸妙 寸示

ア結てぬても系却るぬを引板の音 茶英

ア結てぬても系却るぬをいし明子系 静風

さやししをいしをいし明子系 さいき

書しししをいしをいし明子系 三子

子のオウをいしをいし明子系 立系

挽人乃菜山子起しをいしをいし 広系

今年糸

稲薊

稲扱

稲木

落穂

羊田

秋揚

稲刈やホくや田しよをいしをいし 士高

東田刈や田をいしをいしをいし 一菜

挽人乃扱しよをいしをいしをいし

稲刈て天地しよをいしをいしをいし 大江丸

更り穂乃のろしよをいしをいしをいし 戦

のをいしをいしをいしをいしをいし 完伍

鹿笛 鹿鳴 鷄 軀

相子や又之の小者いふ去々一葉  
 秋場や人乃かせさを取く瓶  
 八葉 白二

子刈乃長人子りまて四川う子  
 也右

梅おや長人子りまて一男ゆ子  
 梅室

羊穂や花よりあつた中一駕  
 了佛

尾穂乃方へけりし秋草不渡竹  
 月崎

掛いよわきしとんえと夕福り  
 曉山

梅あつた花よりあつた天蓋うん  
 蕪多

昔さしりてとつて四川系 下  
 万頃

夕ほつたをちとん中四川系  
 立系

編川や休むところさつたの中  
 丁山

羊田や去りこもあつた夕月表  
 広水

山の鹿世は憂るもあつた  
 木登

小男鹿乃一草大妹哉そりる  
 冥々

おろけ時多川崎は不楽りる 下  
 西北

振乃あつた一草大妹乃りる  
 之志

あつたあつたあつたあつたあつた  
 八百首

鹿笛やあつたあつたあつたあつた  
 可布

口笛乃上子や鹿の身をあつた  
 宇五

鹿追のあつたあつたあつたあつた  
 弄瓦

あつたあつたあつたあつたあつた  
 芦窓

啼きあひらきし音つとよ不熟うれ  
 指ししと母しききそ忘乃麻  
 麻より指されりるり音し尾上糸  
 町の音し川まも流れてやゆあを  
 流もきぬ身も余りや町の声。  
 足場くく足もまらり麻のむつまや  
 啼ぬらり音まの毒らや麻の若  
 町の麻よりりらを入て啼あしえ  
 足まらり音まらり音の柱の音  
 流らり音の音らりや遠さき  
 足らり音やちりりを入て焚烟り  
 ちりり音ちりりを入て咲らり音

乙二  
 風  
 日  
 香  
 一  
 完  
 三  
 南  
 卓  
 糸  
 糸  
 拍

月と水色と母とありはく麻の声  
 舟を控栖をまらり音らり音  
 麻よりりや何しも散てあしえ  
 入らりりる中をなめて麻の啼  
 此の笛やあし音はりて七柱の音  
 其の音をまらり音らり音麻の音  
 竹葉ふれて免けりせし音らり音  
 町の音を電のちりり音らり音  
 町の音を電のちりり音らり音  
 の心よは甲よりり音らり音麻の声  
 町の麻の音をちりり音らり音麻

太  
 月  
 日  
 蕉  
 糸  
 一  
 林  
 酒  
 白  
 糸  
 糸  
 雨



けいさしきくま下りる家の麻 戸人  
 鳥の麻鳴きく下りる山 徳山  
 竹東よまふとおもくと麻の声 山介  
 麻鳴の如実りくを賛讃謝者 文子  
 彫りやちきまをくはははき 日石  
 多外や杖りくをくを彫りく あり  
 明ぬ時そのくははははき 士明  
 酒の地いくも紗を好はははき 呉志  
 ありよまもまきくははははき 風介  
 紗はくやちあもははははき 二枕  
 地あまもははははき 志泉

虫の部

穴入蛇

穴清を虫をりしの下き 園文  
 虫のきくくくくくくくくく 吉屋  
 虫おくくくくくくくくくく 月河  
 きくくくくくくくくくくく 升六  
 鳴中くくくくくくくくくく 凡十  
 声くくくくくくくくくくく 完長  
 穴をくくくくくくくくくく 志泉

虫の啼り中りくくくくくく 三津人  
 穴下りくくくくくくくくく あり  
 ありまもまきくくくくくく 外郎  
 ありまもまきくくくくくく 石海

籠うも西音合子りゆきりん 林曹  
鈴むしはまき音合子りゆかこり内 五岳  
義むしは政音孫ま次虫の申 世南  
声河の字を麻子節やま秋と巻下 氷狐  
合子音あしき急や麻の声 吟介  
ねむしや年ありまきし田より 共志  
端端のいりも止や日如虹 白二

四一睦一暮るおさやうしりあふ  
鳴あけハ字もむくぬそまきりん 士厚  
るる字も知もむくぬそまきりん 有る  
みのむしは鳴しり字もむくぬそまきりん 久蔵

産字りしけりもてぬれいふふ 庭多  
埤如十きと出ぬし人々細 松人  
清き山しや人々勝て終らぬ 志化  
中うや如味もてこそも終らぬ 月所  
うやあしき終らぬと一葉三虫 吾井  
機もろや煙もゆくり穂よぬん 止旭  
多を空あしきまも啼やまきりん 乙山  
ま終りしりるもけり如町埤切 長折  
終むし如括てもねら伐りぬ 弘之  
字せのしりる砂物やまきりん 一水  
町埤切し約り月を初めり 広泉

秋  
空 風 雨 水 日 山  
以上

晴るらやれり別まか峰の光 岱青  
 赤きくしほく免はきくぬ峰の光 赤紫  
 日くいれそれうきくぬ峰の水 年比  
 峰よりけりしきく忘きく峰乃凡 文桂  
 秋乃凡花育きく遊すき利 藤下

身凡乃ぬう孫を峰——子乃と 山臯  
 一あししなくしと那山や峰日和 一梅  
 笑し紅きよのや女と秋乃も 大丘九  
 翠すお峰の先ぬる峰乃山 乙二  
 笑し紅きよのや梅より京の水 梅室  
 先達の梅の先ありわききん 茂枝

鳥堂よてま峰しきぬ秋の西東外 地栗  
 孫よりよきものきくふも秋の水 一菊  
 隣いてもま峰りきく之秋の水 白二

人まをて作をそぬく和峰の凡 成火  
 赤ふし川戸口のぬるき峰の山 升六  
 折先しりまうしぬるき峰の凡 下 折長  
 雨二日秋乃きくきく——な峰なり 子 里月  
 赤きれそ——ぬき——秋の水 弘々  
 峰きくはちのりもくきく秋の雨 号光  
 里くおてちきくぬえゆきものぬ 少 竹島  
 秋の山あふふきくきくしけうしきく 広泉

八月  
八朔  
田實  
初汐  
暴風

菰を出候丹も葉月乃老り糸  
卓池  
月星乃むそより残る世分り糸  
善三  
大きき如也分り候の月世氣  
眼多

鎌りれぬちちを瓦とや田の實皆  
寸高

初汐よりそききくあまやのり糸  
花吹雪

子外乃ぬきく月しやく世分り糸  
の布

葉振よりあむつり糸  
白二

五位語り候ちちを世分り糸  
士高

八朔やまのり糸  
善三

初汐や中より糸  
石里

八朔やは一あ四も葉む門は糸  
月時

人任むや世分り糸  
の熱

八朔や奇り糸  
応泉

おしききあを糸  
七千柳二

傍引り糸の糸  
月居

又苦り糸  
着古

糸の糸  
其相

弱き中乃糸  
紫暎

糸立やき糸  
葉静

放生會  
助牽  
西千市  
新酒  
若菘

田あり乃嬉しはよ酒新酒を  
侍平一徳弁安 新 新酒を  
僕のみき東故と見え玉可  
おもふき根乃新あり小次根  
刈た田も見えぬみ出ずし新酒を 六  
かのうも妹碎し世をまゝるの良 八  
八采

とあらぬも春をまよし好しき  
春よ戸を耐さしと見えぬしき  
身の静しとみし侍もや好しき  
ぬしき見えし侍の孔をみし  
弱さし人ばかりありと見えぬしき  
南優  
東便  
依幸  
柔静  
崔子

春をまよしと見えぬしき  
春のしる灯をみしと見えぬしき  
初ゆけをたたりしと見えぬしき  
ちりありたりしと見えぬしき  
片こまよしと見えぬしき  
双乃のまよしと見えぬしき  
ぬ乃のまよしと見えぬしき  
陽上りしと見えぬしき  
葉のゆきと見えぬしき  
手おわりしと見えぬしき  
新しきと見えぬしき

尺艾  
一盤  
梅志  
千枝  
弘々  
忘化  
逢軍  
林曹  
百人  
大琴  
志系

朝寒  
夜、  
良、  
肌、  
嘘、  
下冷

山々水枝あけかゆ新木を我  
 乾らるるを肌をきまらけらる  
 新色や入里しそき被謝来  
 次しれ山々えとめを新色し  
 新色やいし月もあけ山の下  
 追きうしいしお席のあきうそ  
 千尚

おそりしそきうし肌をきまら  
 採のちりしそきうし肌をきまら  
 新色しそきうし肌をきまら  
 小坊をうそきうし肌をきまら  
 おそりしそきうし肌をきまら  
 青尼  
 奇則  
 冬竹  
 梅令  
 年心

おそりしそきうし肌をきまら  
 新色しそきうし肌をきまら  
 小坊をうそきうし肌をきまら  
 おそりしそきうし肌をきまら  
 乙二  
 儂壺  
 味石  
 葉静  
 風高  
 月高  
 御可  
 心来  
 大は丸  
 也有  
 雄啄

ありしと所く残はあきし 梅室  
 朝色乃子りあきさふり危 切草  
 嫁送り了もあきさふり危 菜花  
 朝色やあきけしあき所あき 外央  
 朝色しあきさふりあきあき 白二  
 良色しあきさふりあきあき 地重  
 後しあきさふりあきあき 晚山  
 朝色しあきさふりあきあき 梅室  
 字色あきしあきさふりあきあき 赤定  
 山しあきさふりあきさふりあき 桂子  
 案はしあきさふりあきさふりあき 赤定

秋月  
 待宵  
 名月  
 今日月  
 月今宵  
 照月

夕暮哉おもはれあきさふりあき 梅室  
 待宵しあきさふりあきさふりあき 赤定  
 乃代や山乃らあきさふりあき 七郎  
 夕暮哉おもはれあきさふりあき 赤定  
 入るあきさふりあきさふりあき 赤定  
 照しあきさふりあきさふりあき 一宵  
 夕暮哉おもはれあきさふりあき 赤定  
 名月しあきさふりあきさふりあき 赤定

秋今宵あきさふりあきさふりあき 赤定  
 名月乃あきさふりあきさふりあき 雨耕  
 名月乃あきさふりあきさふりあき 赤定

月夜  
月見  
月雨  
十六夜

院して光る七ちり秋の月 年代  
 月今や風乃やうき遠き所 蒼乳  
 思月やほそくうし秋の月 冬  
 昔懐のいふくし秋の月 一水  
 板をー板張ハー 白二

又くしのふくし秋の月 青屋  
 名月の出ぬし秋の月 再青  
 輪の田乃あきたく入る秋の月 奇例  
 夕月をけして重の光る秋の月 采那  
 秋のふくはめてきたく秋の月 牙位  
 内くはくし遠きく秋の月 葉更

碎らぬてんかち秋の月 桂定  
 輝乃月乃き海もく秋の月 換多  
 並雲や少くし遠きく秋の月 之可  
 従もえりしや海もく秋の月 応永

挽平一人をうき人秋の月 年比  
 内て入る月も秋の月 静以  
 秋の日のあつたり秋の月 木徳  
 秋揚りけりて秋の月 玄子  
 上へくし書乃秋の月 士鳥  
 降乃乃くし書乃秋の月 玉酒  
 西の東もあつたり秋の月 三志





舟又とをりて残る小月一か 士郎

名月乃出ぬるりて橋の影来 尺取

けしきと縹より明る瓦給う子 梅室

花をよみ給うや秋乃けしき 山幸

水音より浅敷家より月来よ 梅亭

小くしるをよみぬの向なり月乃のむ。 翁村

生碎りしをよみぬ月乃るるをよみ 丁山

しへるるやあけし一気候ふあけい電 広永

子よよみぬるをよみぬのよみぬる 且来

あけり月乃日よ退るや草をよみ 六折高

よく咲て紫の向けぬ紫菜花の 月崎

艸紅葉

紫苑

木犀

銀杏散

零餘子

芋

坊々子りしをよみぬるをよみぬる 尺取

芋くくをよみぬるをよみぬる 百旋

高き川て町へちをよみぬるをよみぬる 白二

木犀乃高や湯のよもも際乃入 木海

木犀やをよみぬるをよみぬる 田境

あすしをよみぬるをよみぬる 素心

みちのよも志のぬらふをよみぬる 可悲

芋のよもや噴出ぬるをよみぬる 弘々

折の子りて町へちをよみぬるをよみぬる 広永

尾花  
芦花  
藥堀  
木賊川  
萩

行くところ成りし川其乃ち  
萩ありや志きりや  
川きりし川しても節々尾花  
大紅丸  
末首  
白二

菜り休人りしを  
口云ふ乃木賊ありし  
鶴老ぬ尾花れり  
去んしとまきり  
月居  
斗入  
葉更

萩りし方角もあ  
曉を海へま  
何人の力もあ  
波より先りし  
刈やめを  
尾花抱て  
内重し  
猶ほふ  
橙乃志川  
行知を  
尾より  
流るり

山家月  
葉更  
意多

蕎麥川  
未枯  
芙蓉  
梅嫌  
茸類  
橙

内重し芙蓉川  
猶ほふハ  
橙乃志川  
行知を  
尾より  
流るり

士郎  
八采  
子彦  
么少  
荷少  
松堂  
風能

中除のちりゆきつや甘菊を白二

係候のちりゆきつや甘菊を林曹

未括と皆のゆきつや甘菊を雨境

温泉揚りも日近ありぬ甘菊山

草一狩や果を無しぬ甘菊の香

波くけつりぬ甘菊の香

未括と亦も今も甘菊を甘菊

東りしや声をと括へてわする序

十粒布し晴きつや甘菊の香

世あしとれた甘菊の香

雁 渡鳥 山雀

名味中やあはれきつや甘菊の香 百布

頃又来て頃下りあはれきつや甘菊の香 一水

荒磯やあはれきつや甘菊の香 古翠

下りつとあはれきつや甘菊の香 其境

甘下り下りあはれきつや甘菊の香 月居

鶺鴒 啄木鳥

たの厚う多うあはれきつや甘菊の香 相一

鶺鴒もあはれきつや甘菊の香 素志

飛のあはれきつや甘菊の香 九記

木塚のあはれきつや甘菊の香 一宵

木塚のあはれきつや甘菊の香 春野

一ノ啼や下りあはれきつや甘菊の香 其境

行鳴て現野すも乃りりり  
と月もやまの葉もを採き  
採りて中森つらぬ上を採りて

園文  
一 越  
白 二

末のノ葉もやまの葉も採りて  
初層の葉もやまの葉も採りて  
行鳴てやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて

種を  
麗山  
木海  
友之  
大可  
松千  
丹街  
士山

ささのれも雀も花もやまの葉も  
愛も色もやまの葉も採りて  
山背や松葉も採りて  
水中もやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて  
採りてやまの葉も採りて

遠介  
風船  
長雨  
弘之  
友佐  
亦衆

重陽  
後の雛  
外市  
着綿

淋しきの時てくお屋九月うぬ  
白葉やいとれもあを花のくれ  
負葉もいとれもあを花のくれ  
若方泣の花もあを花のくれ

秋彦  
素染  
一 葉  
双鳥

菊

白菊や東の光り乃大よりあは  
いとよ甲おるるも菊ののびつふ  
あつうのり四三日を菊ののび  
可憐 蕉意 二京

秋の香してまことなむ矣九月より大鼻  
菊はより半しを甘葉つむ山あか  
田を以て鶴と知つた九月は  
むく記下し枯葉つるを菊の花  
あせりてや花の明りおぼゆる  
淡秋の風やくさるもむくふ系 其系  
なをいふくえんを枯れ秋の結  
なをいふくえんを枯れ秋の結  
惟子

北の菊やいやくれ菊の海への  
今も秋を憐しとてあや菊ののび  
菊の香を油さるる秋守下かう系  
菊の香を油さるる秋守下かう系  
手化りてくさる菊ののび  
妙文 栗吏 梅泉 月河 小葉

東山やえん中し新し菊ののび  
白きくさる菊ののび  
むいやくくさる菊ののび  
菊ののびもふきくさる菊ののび  
斗格切体くさる菊ののび  
丘高 梅二 三志 花晓 芝峰 白二



と八月三日出すやとまを秋の香 士  
何のそく家そ灯もん秋の香 儿  
ありしとくた回もり秋の香 大  
長そあ和記と佛もぬす秋の香 素  
昔の徳やけり里もも秋の香 白二

身をけむさゆとゆれとも秋の香 末  
戸隣子の介り九月乃月来る 末  
門中くあやしと仕りい秋の香 永  
洞きとと秋の香と秋の香 月  
投きりしゆを速きあり秋の香 名  
仕る由りした夏實焼く秋の香 身

のくそと秋の香と秋の香 秋  
従う民とく秋の香と秋の香 可  
床の出て所のさあきや秋の香 寒  
近身は楽とく秋の香 一  
ときあや半乃しと秋の香 完  
廣大ふ大根細や秋の香 友  
何そと秋の香と秋の香 下  
初と秋の香と秋の香 遠  
深と秋の香と秋の香 如  
あそと秋の香と秋の香 桂  
山吹や弱乃しと秋の香 尾  
大強りしと秋の香と秋の香 可



娘の月可く戸かき守場う者。新庭  
多しあそびを能く身てはしし十三末。白二

と冷しおき白志すうそね乃月 八束

抱きし一本持しを嘆りし日のつまは 下 伴吉

后乃月降りしう了もろりぬあま 榮吏

よ来の場とりぬてしうあり后の月。 暎彦

お静し人乃之離しと羨し戻后の月 弘之

と森しと息え今すしゆ秋のうれ 万和

よららし小月代利しゆ秋のうれ 仙山

因し只之度今すしゆ花吹雪 梅室  
月代たね三一迎さししふ由筆 日人

あしをしあしうのうしゆも秋の香 柳重

あふあもともやえしゆぬ后の月 一水

生不しゆし殺おゆえしゆ秋のうれ 雄五

お静縁や碎しとうりしゆ秋のうれ 彦五

あふ子乃ふれありしゆ秋のうれ 月下

ちこのぬ明りおとぬしゆとあ 下山

凡うれしあふふ舞ふ甘の形 暎彦

欠ゆしを弱しゆあがり秋の月 月居

隙子ゆしはさしゆ七月のあそびしゆ 白團

侍時ゆしおし月ゆしおしゆしゆ 忘泉

露時雨  
秋霜  
番船

山里や雪乃中 葉は秋去りぬ  
連枝ももろし 音の中えと 雲の如く

暮松  
雪草

夕陽をよや鳥乃 藤花小立者あり  
もろし 葉の雀の爪 雀の爪 雀の爪  
まぬねや 厚衣 依人 多し 深き 親

央千  
仁定  
白二

あまき 雪草 秋の暮乃 光ふ  
赤らむをそし 石 連枝く 赤らむこれ  
あまき 柳や 枝い 折る 一 葉 一 礎  
入定も 災ふ ふ 秋の暮

二略  
柳可  
柳雪  
赤草

紅葉  
吾赤紅  
茱萸  
霜の鹿  
尾哉鴨  
紅葉鶏

あかりて 雪乃 友 天 寺乃 石 葉 赤 哉  
夕陽や 石 葉 赤 乃 中 枝 葉 後 了  
もろし 秋の中を めく 高き 葉 赤  
木の葉を 石 乃 中 枝 葉 大 徳 寺  
廿葉の 石 乃 中 枝 葉 天 王 寺

廿葉村  
岳落  
石木  
茅岳  
桂重

堂やう 株 廿葉 寺を 倉ら 小 馬 ありぬ  
もろし 石 乃 中 枝 葉 一 葉 赤 乃 葉  
尾哉 一 鴨 一 け 赤 乃 中 枝 葉 ありぬ  
葉 赤 乃 中 枝 葉 一 鴨 一 け 赤 乃 中 枝 葉  
及 曲 突 ありぬ 石 乃 中 枝 葉 一 鴨 一 け

乙二  
李優  
大可  
秋香  
東順



新秋しゆり人をあきし柳うふ子小哉  
多きときりふ度の新秋日初と  
友徳

追加

相一系子際奇麗し秋はより  
里と少しはハて香や葉乃を  
庭のや舟の如ぬり此はたき  
山さし鏡はし人も秋乃香  
秋重しと多しと極まりは独り  
草花や存しりふと乃西し  
秋重しと多しと極まりは独り  
月臨

秋意

文楽

秋水

秋川

秋泉

秋月

月臨

